平成16年度初夏におけるアユ斃死調査

鈴木 隆夫

◆背景・目的

平成7年以降、平成8年を除き毎年、初夏に河川を中心に冷水病が主因となるアユの斃死が発生している。そのため、平成16年においてもアユ斃死に関する見回り調査を行った。

◆成果の内容・特徴

・調査を実施した県内10河川のうち、８河川でアユの斃死を確認した。斃死は5月下旬から6月上旬に多かった(図)。水温上昇後の７月中旬の芹川において、ビブリオ菌とエロモナス菌が分離され、冷水病以外の病気によりアユが斃死していた。

・平成７年度以降の各年における斃死量を、県内4河川における5分間流下死魚数で比較すると、今年度は平成9年に次ぐ斃死量があったと思われた。

・湖岸調査では、彦根市長曽根付近で最も死魚数が多く確認された。

◆成果の活用・留意点

・斃死動向を把握するため、今後も継続して毎年調査していく必要がある。

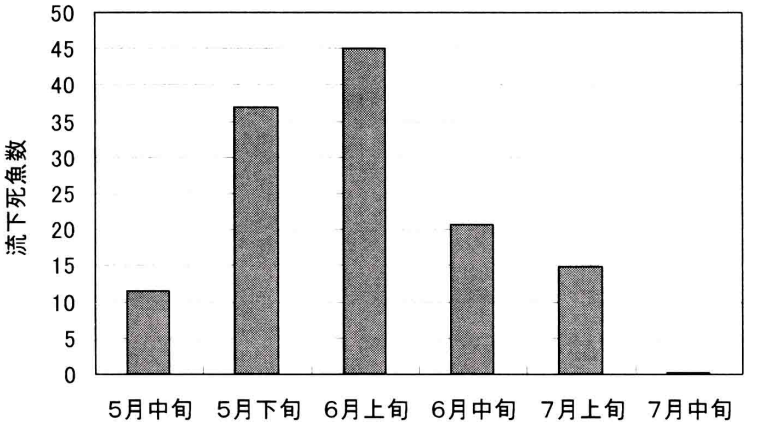

図 平成16年の犬上川、塩津大川、知内川、安曇川南流における5分間当たりの平均流下死魚数